

密集市街地におけるオープンスペースの景観評価に関する研究

関西大学大学院工学研究科 学生員 ○玉置拓也
 関西大学工学部 正会員 尾崎 平
 関西大学大学院工学研究科 正会員 和田安彦
 広島修道大学人間環境学部 正会員 三浦浩之

1. はじめに

現在、我が国ではオープンスペースの整備が進められており、密集市街地においてもオープンスペースとして親水空間などを有する都市公園の整備が行われ、安らぎや落ち着きを感じることで空間が増加してきている。しかし、欧米諸国と比較するとその量は少なく、整備された公園の中には住民のニーズに合わず、利用されていないものもあり、オープンスペースの積極的な整備と、魅力のあるオープンスペースの整備が求められている¹⁾。

そこで本研究では、オープンスペースの魅力要素の一つである景観に着目し、密集市街地内に存在する公園において利用者が求めている景観要素を明らかにし、今後の密集市街地におけるオープンスペースの景観的な整備についての提案を行った。

2. 対象公園，調査概要

密集市街地内に位置し、周辺住民に広く利用されている A 公園を対象として、利用者の公園内景観に対する

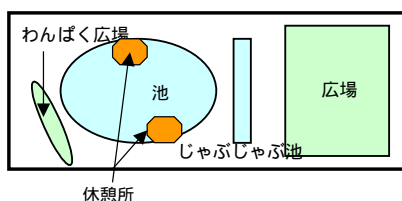


図-1 A公園概略図



図-2 調査地点からの景観

表-1 アンケート調査概要

調査方法		直接面談方式	
調査項目		池の対岸方向の景色に対しての感じ方の度合 池の対岸方向の景色に対して感じる事 利用目的・利用頻度・属性	
回答数		100(各地点25)	
回答者属性		性別	男性：54%、女性：46%
	年代	10代：5%、20代：9%、 30代：29%、40代：25%、 50代：8%、60代：13%、 70代以上：11%	
	職業	主婦：29%、会社員：28%、 無職：21%、学生：3%等	

る評価から、密集市街地内に存在するオープンスペースに求められる景観要素を探ることを目的としてアンケート調査を行った。A公園の概略図を図-1に示す。調査は、公園利用者に対して直接面談方式で行い、図-1内に示す4地点から、対岸方向への景観に対して感じることを回答してもらった。調査地点から対岸方向への景観を図-2に、アンケート概要を表-1に示す。

3. オープンスペースの景観に関する評価

(1) 利用者の景観に対する意識

アンケートにおいて回答者に池の対岸方向の景観について感じることや、対岸方向の景観に対して景観面での希望を自由記入で尋ねた。主な回答内容を図-3に示す。回答内容を見ると、「見晴らしが悪くならない程度の緑がほしい」、「植物はバランスよく植えてほしい」、「樹木が高すぎて見晴らしが悪くなる」といった、緑量を増やすことよりも、見晴らしや見通しの良さを重視する意見が多くみられた。また、「対岸の建物は気にならない」、「建物が見えるのはしょうがない」など、対岸の建物に関してはあまり気にならないといった意見が多い。これらから、密集市街地のオープンスペースの景観に対しては、遠くに建造物が見えることに関してはあまり気にならないが、見晴らしや見通しの良さといった「開放感」を重視する傾向が見られる。

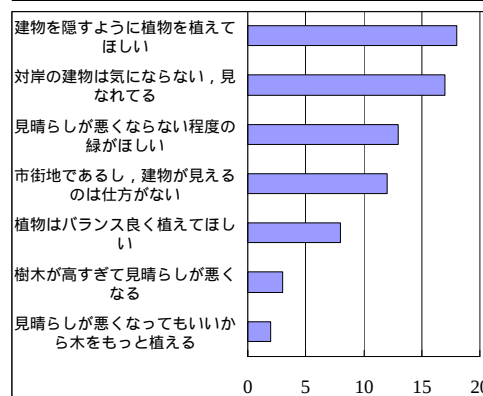


図-3 公園の景観に対する回答例

キーワード：オープンスペース，景観，密集市街地，開放感

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL：06-6368-1121

(2) 利用者の景観評価の要因

利用者に公園内の池の対岸方向の景観に対して 17 の形容詞対の項目を「思う」～「思わない」の 5 段階で評価してもらい、SD 法を用いて各項目別に評価を行った。評価結果を図 - 4 に示す。これによると、全体的に公園内の景観に対する評価は高くなっている。

次に、好きな風景の構成因子を明らかにするために、重回帰分析を用いて分析した。分析の結果、池の対岸方向の景観評価に影響の大きい項目は「親しみ」、「開放感」、「水の動き」、「統一感」の 4 項目であった。得られた回帰式を以下に示す。

$$y = 0.624 + 0.314x_1 + 0.210x_2 + 0.176x_3 + 0.137x_4 \quad (1)$$

ここで、 y ：景観の全体評価

x_1 ：「親しみ」に対する評価値

x_2 ：「開放感」に対する評価値

x_3 ：「水の動き」に対する評価値

x_4 ：「統一感」に対する評価値

自由記入欄による利用者の景観に対する意識と、この重回帰分析の結果から、密集市街地のオープンスペースの景観に対しては「開放感」が大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。

(3) 開放感に対する評価

A 公園の整備状況から、開放感に関する評価を行った。評価には各対象地点から対岸方向に撮影した写真を使用した。写真の左右の幅は、人間の左右の視野が各 60° であること²⁾から対象地点中央から左右 60° ずつの範囲を用い、対岸の奥まで見渡せる距離を高さとし、対岸の奥まで見渡せる範囲を底辺とする三角形の面積（以下、可視面積とする）と、SD 法による開放感の評価値との相関関係を分析し評価を行った。対象地点ごとの視距離および可視面積を図 - 5 に示す。

各対象地点から対岸に存在する物までの距離と、対岸まで遮る物が存在しない範囲の対象地点からの角度および可視面積と「開放感」の評価値を表 - 2 に示す。結果、対岸の奥までの距離と開放感の評価値、対象地点からの対岸まで遮る物が存在しない範囲と開放感の評価値には関連性は見られなかったが、可視面積との間に関連性が見られた。可視面積と開放感の平均評価値との関係を図 - 6 に示す。これによると可視面積と開放感との間には可視面積が増加すると開放感の評価値が高くなる傾向が見られる。よって、開放感を感じられるように整備を行うには視距離だけや左右の広がりなどのどちらかだけを重視するのではなく、視距離と左右の広がりをバランス良く広げ、何も無い空間ができるだけ大きくなるようにすることが重要である。

4. まとめ

- 1) 密集市街地におけるオープンスペースの景観に対しては、見通しや見晴らしの良さといった開放感が大きな影響を及ぼす。
- 2) 開放感を感じられるようにするためには、視距離と左右の広がりをバランスよく広げ、何も無い空間ができるだけ大きくなるように整備することが必要である。

【参考文献】1) 国土交通省：都市公園の整備状況 2) 篠原修・景観デザイン研究会：景観用語事典，pp42-43，彰国社，1998。

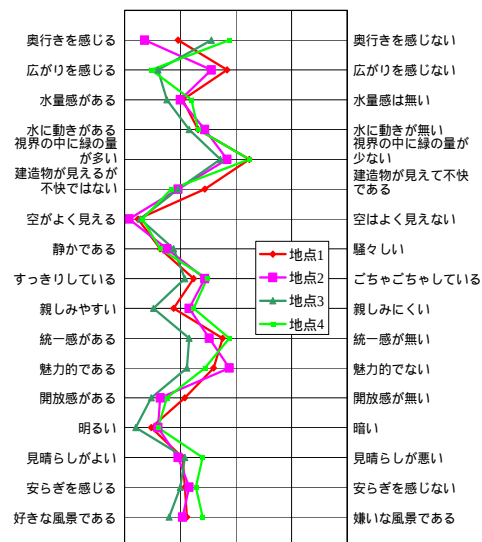


図 - 4 景観に対する各項目別の評価値

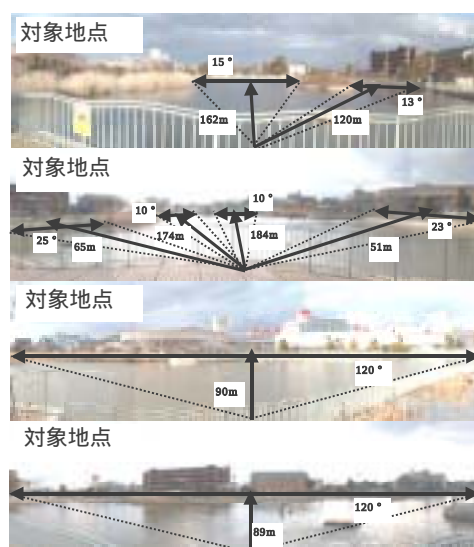


図 - 5 対岸までの視距離と可視面積

表 - 2 「開放感」の評価値

	視距離 (m)	角度 (度)	面積 (m ²)	開放感の評価値
対象地点	162	15	4,414	3.9
	120	13		
対象地点	184	10	8,186	4.4
	174	10		
	65	25		
	51	23		
対象地点	90	120	8,100	4.5
対象地点	89	120	7,921	4.2

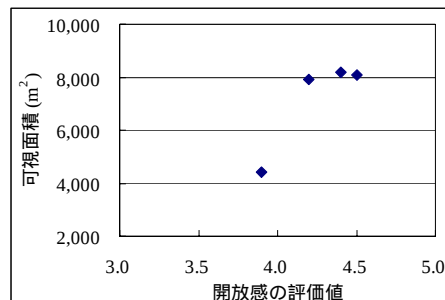


図 - 6 可視面積と開放感の評価値